

DAYS BLG！から見た超高齢社会



NPO法人町田市つながりの開 DAYS BLG！ 理事長 前田 隆行

1. 町田市について

東京都町田市の住宅街に於いて、二世帯住宅の1階部分を改築し居場所を提供しているが、この事業所がある地域の高齢化率は45%にもなっていて、所謂「都市部における限界集落」そのものが現実として目の前に横たわっている。

ところで近隣の地域包括支援センターと共催で地域ケア会議を開催したときのこと。この地域と同様なことが全国的に考えられる近未来予想とし、既に2011年3月12日公開されていた映画『ホームカミング』（仕事一筋に生きてきた男が定年退職後、かつては理想の町と呼ばれながら現在は老人街と化した町に活気を取り戻そうと、町おこしのお祭りを実現させようと奮闘する人情喜劇）の舞台が事業所近隣地で撮影され、実際に地域で暮らしている方々もエキストラとして出演していたと耳にし、本映画の視聴会と併せて行うこととした。しかし、言葉の問題が浮上してきたのである。私たちは現状から見た地域を“再び輝いていくプロジェクト”なる提案をしたのだが、まず“再び”ということとは現状輝いていないということ「昔は・・・」という声が上がってきたのだ。それを聞き、ハッと思った。迂闊だったのだ。すぐさま反省をし、プロジェクトの名称を「輝き続けていくために」と変更したのである。

町田市の高齢化が進行している一部地域でのことなのだが、これは全国同様であり、地域が感じている課題や未来像を考察していく。そうすることによって、誰にとってもフレンドリーコミュニティの一つとして、またジブンゴトとしても捉えていくことができる。

2. 地域とは？

まず本項で取り上げたいのが「地域」という言葉である。前項でも述べた通り、例えば仕事一筋で生きてきた人たちは、恐らく今までの生活パターンとして早朝～深夜まで仕事のため、または営業接待のために頑張られ、自宅には寝るためだけに帰るといった繰り返しが多かったと思われる。実際に転勤のなかった団塊の世代に聞いてみたところ、10人中8人が「その通り」という回答だった。そこで改めて自宅のことや近隣のことについて考えていただくと、地域とのつながりが希薄ということに気が付かれたのである。では彼らにとっての地域とは、どこのことを指すのだろうか。

ここで『Wikipedia』で調べてみたところ次のように記されている。『同じ性質をもっているなどの理由からひとまとめにされる土地のこと』という具合だ。しかし詳細に調べていけばいくほど、地理学なるものが登場し、更なる広がりや深さを醸し出してくる。アメリカ地域論、イギリス地域論、ドイツ地域論等々、一度手を出すと本項に戻って来れそうもないので、ここで言う地域とは一先ず「自宅周囲およそ中学校区」と仮定する。そして彼らの居場所については、つぎの3つが考えられる。

First place (第一の居場所)・・・自宅もしくは自室

Second place (第二の居場所)・・・所属社会等のグループ
もしくは会社

Third place (第三の居場所)・・・DAYS BLG！等

それぞれの人生において、長い時間を過ごしている場所が、その人にとっての居場所と考えるならば、仮定とした「自宅・・・」という居場所に限定して考えることは如何なものか。Second place とされる居場所で長い時間を過ごした人たちは、そこが居場所となり、地域となるのではないだろうか。すると、もし、病気や障害等でそこから突如切り離されてしまった人たちは、慣れ親しみのない First place で過ごすことが強要されてしまいがちであろう。自信を喪失し、不安を抱えながら、の生活は決して明るいものとは言えないだろう。そこで、仲間とつながり、仲間と一緒に、再び社会参加できる場所、それが Third place の役割になってくる。

3. DAYS BLG！とは

例えば、認知症のある人が言われる「生きづらい」ことや「生活しにくい」ことは、どういうものだろうか。それは自らの意志とは関係なく、自らが望んでいない生活を余儀なくされること、また社会や環境が整備されていないこと等ではないだろうか。しかし、それは認知症のある人に限らず、私たちにも当てはまることが多くある。私たちは今まさに“認知症を自分事”として考え、一人ひとりが人生の主人公でいられるような社会や環境にせねばならないと考えている。

そんな認知症のある人の想いをカタチにしていく場所、それが DAYS BLG！（以下、BLG！）なのである。そして、それが Third place としての機能をも担っている。位置付けとしては、介護保険の地域密着型小規模通所介護に分類され、1日の定員が10名という小さな事業所だ。名称に関しては意味をよく尋ねられるのだが、前述した想いを込め

要支援者のほとんどは、身の回りの動作は自立しているが、買い物など生活行為の一部がしづらくなっている。

て短縮し、次の頭文字を取ったものになる。

DAYS (日々、毎日)

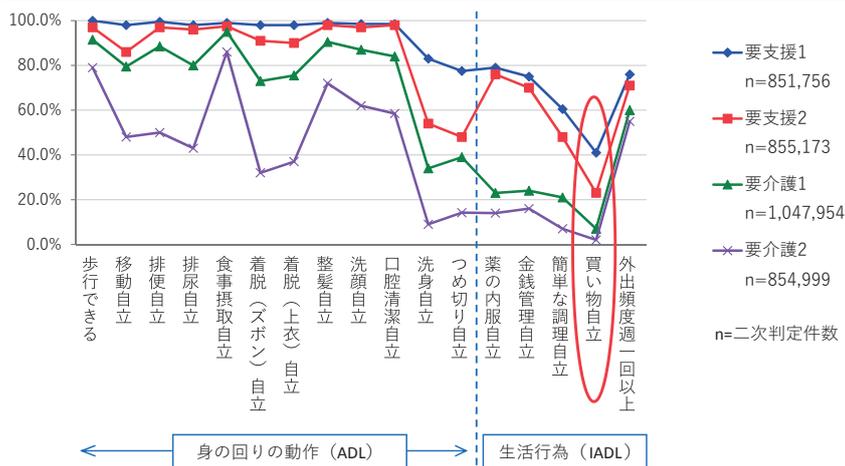
B (Barriers 障害)

L (Life 生活)

G (Gathering 集う場)

! (Exclamation 発信)

これは2012年8月1日より開始しており、“利用者”と“スタッフ”という支えられる側と支える側の線引きをしておらず、そこに集うすべての人がメンバーと呼ばれる。メンバーの想いを実現する場所として、再び社会の一員となり、生活者として納税者として自分の力で継続できるよう、他のメンバーら仲間と一緒に活動しているのがBLG!なのだ。



※1 「歩行できる」には、「何かにつかまればできる」を含む。

※2 平成23年度要介護認定における認定調査結果(出典:認定支援ネットワーク(平成24年2月15日集計時点))

図 要支援1～要介護2の認定調査結果

4. フレンドリーコミュニティ

例えば、買い物の場面を想定してみる。よく耳にする「認知症だから計算ができず、大きな札を出して小銭入れが膨らんでいる」ということ。本当にそうだろうか？ BLG!メンバーは「後ろに人が並んでいるから、計算するのが面倒だ」と言っている。このような日常が繰り返されていくうちに、買い物自体が面倒となってしまう、買い物を諦めてしまうということにつながるリスクもあるのではないだろうか。しかし、時間があれば計算し、小銭を出して買い物ができるのであれば、「ゆっくり時間をかけて支払いができる専用レーン (以下、Slow lane)」という環境を整備することで、後ろを気にすることなく計算しながら小銭を出して買い物ができる。これは認知症当事者に限らず、利き腕を骨折している人、妊娠している人、子どもを連れた人、様々な人たちにとっても安心できる環境と言えるだろう。

イギリスのセインズベリーというスーパー。ここではSlow laneならぬ、Slow dayを実施している。これは週に1日だけ「ゆっくりと買い物ができる日」として、更に店員も積極的に声を掛け、客からのサポートを依頼しやすい環境にしていく。認知症当事者をはじめとする、何らかの生活のしづらさを感じている人は買い物がいやすくなり、気兼ねなく買い物を楽しむことができている。この買い物を楽しむことができているということは、積極的に外出し、社会とのつながりを自ら継続していることにつながる。

ここで図を見ていただきたい。要支援者の生活行為 (IADL) の金銭管理の自立が約8割を示しているのに対し、赤枠内の買い物になると約4割に減っている。これは何を示しているのだろうか。前述のイギリスのセインズベリーというスーパーでは、通常営業日よりもSlow dayの売り上げが1.5倍もあるという。ここでこんな仮説が立てられないだろうか。Slow dayでは通常営業日の買い物を諦め

ている人たちが、挙って買い物を楽しむために来店しているのでは、と。

これを日本のスーパーで実施するというのは難しいかもしれないが、Slow laneならば可能ではないだろうか。特に何か新しいシステムを導入する訳でもなく、客から見やすい位置に「Slow lane」と掲げるだけで良いのだ。この仮定からだと、店側も売り上げが1.5倍増収することになる。

ここまでは利用する側、客の視点で見ていたが、はたらく側にとってはどうだろうか。Slow laneでは、レジ打ちもゆっくりと確認しながら行わなければならないだろう。それはつまり、認知症であったとしても、はたらき続けることができるスーパーになるかもしれない。誰にとってもやさしいまち、それは自立支援の先にあると言っても過言ではないのではないか。

5. おわりに

これらは日々活動を一緒にしているメンバーさんの姿から学んだことでもある。皆「常日頃から自分が認知症だと思って生活している訳ではない」と言われている。確かに、その通りだと思う。例えば他の病気や障害であればどうだろうか？ 自分は「○○なのだ」と言って歩くだろうか？ 認知症が重要なのではない。その人が今、何をしたいかという想いと、それを考え共に参加してくれる人の存在、ここが重要なのではないだろうか。

前例がなければつくれば良い。仲間がいなければ声を掛ければ良い。きっと共感する人たちがいるはずだ。誰かが何とかしてくれるだろうという他力本願ではなく、自ら動かなければ何も始まらない。そして想いを実現するためには、本人に想いを聴くことから始めてみる。すべては、いま認知症のある人から受け渡されるバトン、これから認知症になる私たちへバトンをつなぐためにも一。